

## 楽府詩人元稹の研究

長谷川, 真史

<https://doi.org/10.15017/1500458>

---

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

論文題目 樂府詩人元稹の研究

氏名 長谷川 真史

### 論文内容の要旨

中唐の詩人元稹の研究は、従来そのほとんどが杜甫研究や白居易研究の視点から関連付けられて散発的に行われてきたに過ぎない。近年、白居易に関する研究は質量ともに充実しているのに対して、元稹研究は「唐代文学研究の弱点」とする指摘があるほどにまで遅れている。中でも元稹の樂府作品に関する研究にはこのところ目立った成果が挙げられていないのが現状である。しかし、元稹は当時の詩名によって「元才子」と称され、白居易と共に「元白」と併称されるなど、中唐における文学的功績は決して白居易に劣るものではない。また、元稹は杜甫の詩をいち早く評価した「杜甫の発見者」としての功績も無視できない。さらに、古文の唱道者である韓愈や、樂府作家である李白、李賀らの作品を受容し、これらを強く意識した樂府作品を創作している。従って、元稹の樂府作品の中国文学史上における位置付けを再検討することは唐代文学の研究において正に避けては通れないものである。

序論では、これまでの日中における従来の元稹研究の状況を整理し、日本では白居易との交友を中心に唱和詩についての研究が、一方中国では元稹の事蹟と当時の社会状況とを結び付けた考証的研究が、それぞれに主流であるのだが、日中いずれにおいても元稹の樂府創作の理論や樂府作品そのものに対する研究が不足していることを指摘した。そのうえで、元稹の樂府創作における虚構の物語と現実への訓戒という特色に注目し、中国文学史上において、杜甫の社会諷刺詩が宋元時代以降の社会批判文学（特に『水滸伝』などのアナキズム文学）の萌芽に重要な役割を果たしていることを論じた。

第一章では、元稹の一族が北魏の皇族にまで遡る由緒正しい家系であることを確認した。また、若き元稹の文学に表される玄宗朝への憧憬は、皇族の末裔としての自負と零落した元氏一族再興の志とに支えられたものであったことを指摘した。

第二章では、玄宗朝の代表的詩人李白の強い影響を受けた樂府作品「将進酒」を考察する。李白や李賀の「将進酒」が飲酒の享樂を詠じているのに対して、元稹が主君への忠節を主題として「酒を飲むな」と詠じていることに注目し、元稹「将進酒」が従来の樂府に不満を抱き、諷諭を旨とする本来の樂府に復帰することを目指して創作された作品であると位置づけた。

第三章では、李白と共に「李杜」と併称された杜甫の影響について、元稹が杜甫をこの上もなく崇拜し、その作品をいち早く発見、評価したことを述べた。また、元稹「代曲江老人百韻」が杜甫の歌行「哀江頭」を強く意識した内容である一方、型式や用語という点においては杜甫の五言長篇詩の影響が見られることを指摘した。そして、杜甫の歌行における諷諭性は元稹の楽府創作へ、五言長篇詩は元白唱和詩へと、それぞれに展開し、間違いなく杜甫が元稹の文学創作の原点となっていることを指摘した。

第四章では、元稹が制作した唐代伝奇「鶯鶯伝」の作中詩「会真詩三十韻」を考察対象とした。「会真詩三十韻」が杜甫の五言長篇詩の形式を踏襲しつつ、恋愛を主題とした艶詩であり、直後に主人公張生の訓戒の弁が配置されることで、虚構の物語によって現実への訓戒を効果的に伝える構成となっていることを指摘した。

第五章では、元稹に通州左遷中に二人の進士と唱和した楽府古題十九首のうち「董逃行」を考察対象とした。従来の楽府古辞や擬古楽府にはない主題を用いることで意表を突き、「楽府古題序」に述べられるような「新意」を打ち出しそうとしたことを論述した。

第六章では、さらに「楽府古題序」の「新意」について、楽府古題十九首のうち、実際には新題である作品と伝統的な古題を用いた作品とをそれぞれ考察し、元稹が伝統的な楽府題を逆手に取った奇抜な発想によって自己の作品を創作し、楽府の復古と革新とを実践していることを指摘した。

第七章では、元稹の出世作であり、楽府の集大成的作品でもある「連昌宮詞」について、筆者が中国留学期間中に行った連昌宮故地の実地踏査の結果に基づいて考察した。さらに、連昌宮をめぐる詩人とその作品について考察し、中唐において連昌宮がすでに廃墟と化していたことを明らかにした。

第八章では、「連昌宮詞」について、元稹が第一の読者を穆宗皇帝に想定していたことを論証し、その成立時期について、従来の説とは異なる元和十五年とする説を打ち出した。また、「連昌宮詞」における宮殿描写が実は華清宮のものであることを明らかにし、元稹が廃墟と化した離宮を描くことで皇帝の行幸を諷刺し、行幸に伴う莫大な出費を避けるべきだとする主張を展開しようとしたことを論証した。

以上を総括して、本論文は四つの観点から結論を提示する。第一に、李白と杜甫について、元稹が玄宗朝に活躍した李白の楽府創作を超克し、また生前は不遇に終わった杜甫を高く評価し、その創作理論を取り入れて自らの楽府創作の基礎となったことを指摘した。第二に、唐代伝奇「鶯鶯伝」について、艶詩の詩人と伝奇作家としての二つの側面が現れており、元稹の位置付けが楽府詩人と流行作家とに分化していく分岐点となったことを論述した。第三に、白居易との関係について、元稹と白居易とが生涯の友であると同時に、詩才を戦わせた好敵手でもあり、「長恨歌」「新楽府」によって一度は白居易に譲った地位を元稹は「連昌宮詞」によって取り戻そうとしたことを述べた。白居易は元稹の文学創作において生涯不可欠な存在であった。第四に、元稹の文学創作の物語性について、「鶯鶯伝」を転換点として、虚構の世界に実在の人物を登場させ、現実社会に対する教訓を導き出すという様式が形成されていることを述べた。本論文は、元稹の文学創作がこのような虚構と現実の狭間にあり、その中に構築された物語性が宋代以降の戯曲小説の展開を促したという観点から、中国文学史上における元稹の新たな位置付けを提起するものである。